



鹿島小学校のホームページをご覧ください。

本校は、明治18年に高津原、重の木、納富分の3校が合併され『立教小学校』としてスタートをし、今年で124年目を迎えました。

鹿島市は、長崎県境の経ヶ岳山系とそこに広がる田園、また干満の差が激しく珍奇な魚介が棲む有明海など、豊かな自然に恵まれた風光明媚で人情味溢れる町です。

鹿島という地名は全国七県に存在しますが、特に茨城県鹿嶋市とは、肥前風土記と常陸国風土記に共通に登場する歌垣（うたがき）などの点から、深い交流があったことが指摘されています。

さらに時が流れて関ヶ原の戦い、佐賀鍋島藩は西軍につき敗北、藩祖鍋島直茂は、家康に次男の忠茂を人質として差し出し藩の存続を強く願いました。忠茂は2代秀忠に仕え下総国矢作（千葉県佐原市）に5千石を与えられるほど忠勤を示したとのこと、その忠茂が、その後鹿島初代藩主として迎えられています。

本校は、その鹿島藩校弘文館明倫堂の流れをくんでいますが、文教においても栄えある歴史を刻んでおり、本校出身者が、全国各地で社会発展のために活躍されていることはこの上もない喜びでもあります。

本校には次郎物語作者下村湖人先生の作詞による校歌（「われらのいのち」という題名がついています。）の宝物があります。校長室には、湖人先生直筆の手紙が掲げられていますが、それによると、「校歌の作意を次のようにし、

- 1 番が郷土との因縁                      . . . ゆたかな生命
- 2 番が師弟の因縁                        . . . 清い生命
- 3 番が友人（同志）との因縁        . . . 楽しい生命

郷土性をもった学校の本質にふれ、且つ生活の理想にもふれたつもりです。」とあります。まさに、「いのちの学校」、人・生物・自然の尊厳を大切にする学校でありたいと思います。

また、湖人先生は、後に鹿島の偉人田澤義鋪先生と合流され、東京小金井の欲恩館にて、我が国の青年教育に心血を注がれています。「大いなる道」を求めていくことが、個人、家庭、社会、国家の繁栄につながると説かれています。時空を超えて、「道」をはずしつづめる現代社会には痛烈な警告として聞こえてきます。

本校は、その教えのひとつである、一事貫行（ひとつのことを毎日継続すること）を全校あげて取り組んでおり、「大いなるもの」「大いなる道」につながる所作を求めています。

また、一昨年度からは、『「ありがとう」の学校』のさらなる深化を求めています。子どもたち同士、そして教師と子ども、さらには教師と親の間にも、「ありがとう」がいっぱいに飛び交う学校でありたいと願っています。

物が溢れ、何でも手にすることができる時代です。足るを知り、物事を「ありがとうの心」でとらえる心豊かな感性、そして「ありがとうの笑顔」がいっぱいに広がる学校生活でつくりたいものです。

本年度も、職員が入れ替わり、フレッシュな鹿島小のスタートです。私たち職員が円陣を組み、懐を深くして、子どもたちを包み込みたいと思います。

- ①「基本」を育てる学校
- ②「学ぶ喜び」「生きる喜び」を実感する学校
- ③「ありがとう」の言葉があふれる学校
- ④「風通し」のいい学校



どうぞよろしく申し上げます。